

## 短歌行

曹操（四言古詩）

对酒当歌 酒に對むかいて当に歌うべし  
 人生幾何 人生は幾何ぞ  
 譬如朝露 譬たとえば朝の露の如し  
 去日苦多 去り行く日は苦はなはだ多し  
 慨当以慷 概がいして当に慷こうすべし  
 憂思難忘 憂思 忘れ難し  
 何以解憂 何を以て憂いを解かん  
 唯有杜康 唯だ杜康有るのみ  
 青青子衿 青青たる子の衿こそ  
 悠悠我心 悠悠たる我が心なり  
 但為君故 但だ君が為の故に  
 沈吟至今 沈吟して今に至れり  
 呦呦鹿鳴 呦呦ゆうゆうとして鹿は鳴き  
 食野之草 野の草を食む  
 我有嘉賓 我に嘉よき賓有れど  
 鼓瑟吹笙 瑟しつを鼓こし笙を吹かん  
 明明如月 明明として月の如し  
 何時可掇 何れの時にか掇ひらうべし  
 憂從中来 憂いは中より来る  
 不可断絶 断ち絶つべからず  
 越陌度阡 陌を越え阡わたを度り  
 枉用相存 枉まげて用って相い存ねん  
 契闊談讌 契闊けいかつ 談讌だんえんして  
 心念旧恩 心に旧ふるき恩めぐみを念おもう  
 月明星稀 月明らかにして星稀まれなり  
 烏鵲南飛 烏鵲かささぎ南に飛び  
 繞樹三匝 樹を繞めぐること三匝そう  
 何枝可依 何れの枝にか依る可けん  
 山不厭高 山は高きを厭わず  
 海不厭深 海は深きを厭わず  
 周公吐哺 周公ふく哺みしものを吐き  
 天下歸心 天が下みな心を歸せぬ

酒を飲む時は、おおいに歌うがよい。  
 人生はどれほどの時間であろうか。  
 たとえてみれば、朝の露のようににはかないもの。  
 去っていく日のなんとおびただしいことよ。  
 おおいに嘆きいきどおるがよい。  
 憂いの思いはなかなか忘れ難いものだ。  
 結ばれたつらい思いはなんでときほぐそう。  
 ただそれには酒があるだけだ。  
 青い襟をつけた君ら書生こそ  
 わがこころのはるばる慕うもの。  
 ただ君らがためにこそ  
 わたしは思いにふけてきた。  
 呦呦と鹿は群を慕いて鳴き、  
 野の草を食べて楽しむ。  
 わたしにすばらしき賓客あれば、  
 瑟をつまびき、笙を吹いてもてなそう。  
 あかあかと輝く月。  
 そのような人といつの時か巡り合うことができようか。  
 それを思うと心の奥から憂いはやってくる。  
 断つすべもなく憂いはやってくる。  
 東西南北の田舎のたんぼ道を越えたり、  
 わたしのほうから腰をまげて訪ねよう。  
 それから契を交わして飲みながら語りあおう。  
 心のうちで昔のよしみに感謝して。  
 照りわたる月の夜空に星影は薄れ、  
 かささがが南をさして飛んで行く。  
 その鵲がいくたびも樹をめぐりはじめた。  
 ねぐらとすべき枝を求めてきめかねて。  
 山はいくら高くてもよい  
 海はいくら深くてもよい。  
 哺みしものを吐いて人を求めた周公に  
 天下の人々はみな心を寄せた。